

まこと さき われ
実の商人は先も立ち、我も立つ
 — 石田梅岩の石門心学 —

(株)日本設備工業新聞社
 代表取締役社長 高倉克也

石田梅岩（1685-1744）は江戸時代中期に京都府亀岡市の農家の次男として生まれた。京都市内の呉服屋に奉公に出され、仕事のかたわら在家の仏教学者に師事して勉学に励んだ。手代から番頭に昇格した45歳のときに自宅で念願の無料講座を開き、のちに石門心学と呼ばれる独自の道徳論を確立した。とくに商行為の意義や役割や正当性を説いて商人の支持を集め、最盛期には門弟が400人にのぼったという。松下幸之助や稲森和夫ら著名な経営者も梅岩の影響を深く受けている。

士農工商は職業区分

石門心学は石田門流の心学という意味だ。心学は心を尽くし、性を知るといふ梅岩の学問的姿勢に由来している。己の本性・本心を究明して真のモラルとは何かを探求する固有の道徳哲学を開示した。梅岩自身は性学と呼んでいたものの、門弟たちによって心学という言葉が定着した。

教義の基礎は神道、儒教、仏教の三教合一説となっている。キリスト教的な一神教に依拠するのではなく、三教それぞれの長所を活かして新たな境地を切り拓こうとした。一も捨てず、一に泥まらず=どれも捨てず、どれにも執着せずという商人ならではの合理的精神が反映されているといいたいだろう。

商人学者としての梅岩は士農工商による身分的

差別を認めなかった。士農工商は人間の上下関係ではなく職業区分と解釈し、とりわけ商人の存在意義に光をあてた。

幕府による儒教思想の浸透に伴い当時の商人は農民に比べて何も生産せず売り買いだけで利益を得ていると蔑視されていた。たとえば儒教学者の貝原益軒は「蓋し利を求むるものはひとを害す。ひとを害せずして己を利するものは未だこれあらざるなり」（『慎思録』）と商業に代表される営利活動を否定している。

これに対して梅岩は商人が流通経済の担い手として社会的に重要な役割を果たしていると全面的に擁護した。また商人が万人に奉仕して利益を得るのは武士が主君に仕えて俸禄をもらうのとおなじと説いて商行為を積極的に肯定した。

ただ梅岩は無条件に金儲けを奨励したわけではない。営利活動を健全に発展させるためにも道徳は不可欠だ。梅岩は石門心学を通じて商人の道=商道の原点を訴えようとした。

商道の原点を説く

商行為における道徳論を交えた石門心学の真髄は元文4年（1739）に刊行された『都鄙問答』で知ることができる。全4巻に及ぶ子弟の問答集という体裁だ。

第1巻は石門心学の基本的姿勢や士農工商それ

ぞれの職分に応じた道徳を唱えた総論、第2巻は神道・儒教・仏教の三教合一説や商人の社会的な役割・価値・意義の説明、第3巻は朱子学的な心の問題の探求、第4巻は日常生活における身近な問題への対処法という構成となっている。第4巻には借金に関する問答なども含まれており、石門心学が机上の観念論ではなく庶民に密着した実践的の学問であることを示している。

そのなかで梅岩は商人のあるべき姿として「実の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり」と述べている。売り先としての相手が損し、売り手としての自分だけが儲かるのは真の商人の姿ではない。売り先も、売り手も、いずれも納得できる道理にかなった商売を行うことが商道の原点として簡潔に表現されている。

「商人も是を知らば、我が道は明らかなり。我が身を養わるる売り先を粗末にせずして真実にすれば、十が八つは売り先の心になうものなり」

だから梅岩はいわゆる共存共栄の観点から商人が私利私欲に走ることをきびしく戒めた。利益は至上の目的ではなく勤勉・誠実・正直な商行為の結果としてもたらされるのだと。

「いま治世に何ぞ不忠の士あらんや。商人も二重の利、密々の金を取るは、先祖への不孝不忠なりと知り、心は士にも劣るまじと思ふべし」

士農工商を職業区分に過ぎないと明言した梅岩は商道を武士道にも劣らない高潔なものと考えていた。

社会的責任としての儉約

勤勉・誠実・正直な商売は不断の日常的な生活態度によって培われる。その核心的概念となるのが儉約だ。

「売り先の心になうように商売に情を入れ勤めなば、渡世になんぞ案ずることの有るべき。そのうえ第一に儉約を守り、是まで一貫目の入用を七

百目にて賄い、是まで一貫目有りし利を九百目有るようにすべし」（『都鄙問答』）

梅岩のいう儉約はたんなる金銭上の節約にとどまらず物事総体の無駄を省く努力を意味していた。同時に商人の蓄える利益は決して私的なものではなく天下のために存在するという信念を抱いていた。したがって儉約は私的な蓄財のために行われるのではなく天下のために励行されなければならない。

延享元年（1744）に出した『齊家論』では儉約の本質を次のように説いている。

「我がいう所は正直よりなす儉約なれば、ひとを助くるにいたる」

梅岩によると正直な儉約とは知足・知分=足るを知る・分を知るとのことだ。だれもが知足・知分を自覚して儉約を実行すれば私利私欲による無益な争いも生じることがない。

天下を視野に入れた知足・知分の試みは結果として万民による万民のための人助けにつながっていく。これを現代社会にあてはめると、限られた資源のなかで持続可能な循環型経済社会をつくることを先取りした言葉と見做しても過言ではないだろう。

儉約を基調とする梅岩の実践的道徳論は日本のCSR=企業の社会的責任の原点としていまも普遍的な価値を保っている。企業人には勤勉に働きつつ社会的責任を果たしていくという二重の使命が課せられている。

使命としての社会的責任は社会によってもたらされた利益をふたたび社会へと有効に還元していくことにほかならない。梅岩の説く商道の原点もまさしくそこにあった。欲にくらんで道を見失ってしまう怖さを梅岩はみずからの経験で痛切に感じとっていたのかもしれない。



石田梅岩像